

寓話



小島信夫（こじま・のぶお）

一九一五年、岐阜に生まれる。東京大学英文科卒。高校教師時代に発表した処女作「小銃」で注目される。五四年「アメリカン・スクール」で芥川賞を受賞、六五年、「抱擁家族」で谷崎潤一郎賞を受賞、八一年、「私の作家遍歴」で日本文学大賞を受賞、八二年、「別れる理由」で野間文芸賞を受賞する。著書として他に「島」「夜と昼の鎖」「墓碑銘」「女流」「ハッピーネス」「釣堀池」「美濃」「平安」「菅野満子の手紙」など多数がある。

寓話

一九八七年二月一〇日 第一刷印刷

一九八七年二月一六日 第一刷発行

定価三〇〇〇円

著者 小島信夫

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三二八
千〇二 電話 〇三三〇二二三二
振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

寓 話

序

「それでは、ぼくはこれから、小説家であるあなたに、いろいろとおききます。あなたは答えるのがいやだと思われるなら、ことわって下さい。それもまたあなたのあなたたる所以ですから」それから一息ついてこちらの眼を見つめながら、「それからぼくとあなたとの因縁については忘れて下さってけっこうです」

と若い男は和やかに礼儀正しくいった。男はかつて小説家の年譜作成者であり、彼の死後、小説家の伝記を書くかもしれないといった。何しろ生きているときには書きにくいし、けっきょくは小説家の正体が分らないからだといった。それに小説家のことについての考え方がいく色もあって、いくつもある線が補助線の役割をして太い線をつくりあげて行くのには人は死ななければならぬといった。もちろんどちらが早く死ぬかもしれないけれどももといった。もつともなことである。

年譜作成者は台帖をもっていた。もちろん小説家が生きている限りその分だけ先きへと書きつがれた。年譜が必要なときは、彼の台帖から注文に応じて長短さまざまなものがつくられた。おそらく台帖は、もし彼がどんな情熱にせよ、小説家にたいして情熱をもっているときは、古い時期の台帖の中に新しい語句がわりこんできたり、前のものが消されたりしているのであろうと思われる。あるときそのよ

うなことが、小説家の陰微な喜びにもなり、彼を愛し、彼に声をかけ激励したくなり、いうまでもないことだが、その分だけ憎むようにもなった。たぶん憎むというような強いきわだったありきたりない方はしないにこしたことがないであろう。愛する、というだけならともかくとして。もうひとりの自分自身を作りあげておいて、いまさ何をするのであろう。

年譜の台帖というものが、こんなふうに生き物めいたものになっていなければ、小説家本人自身が、自分を裏切るようにして年譜作成者本人にこそふさわしい情熱をいだいたりすることはないであろう。

小説家はそのルスに相手の部屋へ入っていつて、台帖をひろげ、それにみずから補助線をふやし、明瞭そうなところを不明にしてしまい、読者を混乱させるようにしたいと思うことがあった。読者よりも、台帖の持主を混乱させ、安心感をぶちやぶり、何をしているのか分らなくさせたいというわけであった。そうかといって台帖を無いものにしたというのではなかった。それどころか、小説家は誤解されてもしかたがないほど、愛想がよくなり、何でもいうなりになるという顔さえた。そして何なら、年譜台帖の持主のために、逆にこちらが相手の年譜作成者となり、きき質し、もっともらしい顔をして一行一行書きこんで、それを見せて、これでいいかどうか、あるいはこのくらいのところを手を打つことにしようかと相談をもちかけ、「自分のことはよく分らんですから」と相手がいうと笑って、「本人がいちばん分らないものだからな」といったふうに相槌をうつであらう。そのあと非常に気持がとけあうことが出来る。……

小説家はひそかに恐れている。

「年譜ぐらい無意味なものはない」

と作成者自身が小説家に向っていったら、そういうつもりで、台帖を反古はぐにしてしまうということである。あるいは、いつのまにか、何の沙汰もなく反古にしてしまっているということである。年譜が無

意味なのではなくて、彼が無意味だと思うことにしたということなのであるうか。なぜなら、かすかに暗示的に、「年譜は無意味なものである」といったことがあるのは、小説家本人だからだ。「年譜は無意味ではない」とこれからその仕事をはじめようとしていた作成者は反駁した。もっとも別な暗示もかけてはいた。年譜の作成の話をもち出したのは、小説家であった。

「年譜は無意味ではありませんよ。ただの年譜というようなことはありませんからね。かならず意見と主張と解釈が入るものですから。この点について、ぼくは、最終的には、誰にも御本人にもゆづらないつもりですから。年譜は消されて行つて象徴に至るべきだとか、あなたはあなた自身ではないとか、いうのでしたら、はじめから分りきつたことではないですか。だって人間というものは、どの時代の、どの国の人間も、人間ということには変りがないのですから。これは三百万年とまではさかのぼらないとしても、五十万から百万年ぐらゐまでさかのぼれば、人間と言葉に出していっただけで、もはや象徴的なものですからね。ぼくは先だつて本で読んだのですが、アフリカのある所では三百万年前の人骨が発見されているそうですね。そこへじつさいに出かけて行つた日本人の動物学者、といつても哺乳動物の学者の話を読みました。せまい谷状の地形のところに、頭骨と、人間とかんけいのあるほかの生物の骨が出てきており、その地層をしらべて行くと百万年ぐらゐはそこにいたそうです。ペキン原人が五十万年ぐらゐ前として東南アジアにも百万年ぐらゐ前の頭骨が発見されたのではないですか。それよりずっと前に今いったようにアフリカにちゃんと人間がいたそうですね」

「ほとんど立っていたといつていいようです。そうではないという説もないことはないが、立つたりそうでなかったり、両方やっていたというのが妥当なところかもしれない、と書いてありましたよ。要するに三百万年前に人間であつたことはまちがいはないでしょう。ぼくのいいたいのは、年譜を消した

いのなら、いつでも消せるし、象徴というのなら、何をせずとも、そのまま象徴的存在なのだとということ。ぼく自身にしたらって」

と年譜作成者は一息ついて微笑をうかべた。

「あなたが亡くなれば、——といつても、どっちが早いかわりませんが——あなたが次第に象徴に近づくことは、今から承知しているのです。たぶん安易なそれにですね」

「小説家は作品があるというふうにいわれるけれどもね」

と小説家はさぐるようにいった。

「あなた、そうしてさぐるようにぼくにいわれたことは記憶しておきましょう。年譜に書きこむべきかもしれません。ぼくはあなたはおいやと思いますが、何でもないことも、何でもないときのあなたの言動も、記入しておくことにしているのです。そうすると、くりかえしが見つかります。そういうところをそれぞれの色で傍線をひくと、それが何種類かに分類されるのではないかと思っています。このことはうっかりいってしまったけど、ぼくの秘密だったのです。生前こんなことを口にするのは、不謹慎かもしれません、あとになってみると、これは資料になると思います。そのときのことを言えば、たいがいの喜びはけしとんでしまうのではありませんか。ぼくはあえてこんなことを申しあげてしまいましたが、これはいわぬ方がよかったです。実はぼくは、これはたいへん雄々しい考えだと思うのです。ぼくは自分についてでも、このように死後のことを考えるのは、文句なしに健康な雄々しいことだと思わないわけではないのですが、これはどうしても甘くなります。甘くなつては何にもならないでしょう？　ところが、こういう因縁になったからいわせてもらうことにしますと、あなたについて死後のことをこのように考えると、ひきしまるのです。甘さはないことはないが、その意味がちがいます。何といたらないか、一種緊張をともなったところのものです。もちろん傲ったものでもさもしいものでも

ありません。

くりかえすが、ぼくが次第にふくらませて行くあなたについての、あえて『年譜』といいますが、この資料なるものは、あなたの死後でなければぼく以外の誰の眼にもふれることはありませんですからね。発表するかどうかもしりません」

と相手はうなずいてみせた。

「ぼくがいま申しあげているのをおききになっていると、何だか、どこかの国に住んでいる、あるいは、住んでいたぼくらと関係のない人物のことについてしゃべっているようにも見えます。あなたは小説家で、架空の話が好きで、このところますますそうなっているとおっしゃっているし、そうではなくても、ぼくには大分ウソをついてきておいでですから。笑っているところを見ると、小説を書いたあなたという人間も、あなたと関係のない、どこかの人間のように思っているのではないでしょうか。

ぼくの考えでは、話題にすると、たちまち話題にされたものは、その姿を失うかのようですね。しかしぼくは、簡単に消されて行くものを、復権させるのですからね。時々刻々に消されて行くものです。ぼくなんか、年譜作成者となるについては、あなたによって消され忘れられて行くところのあなた（もちろん、いく分かは、このぼくも含んではいるのですが）のことを、あなた以上に見守り、問題にしてくださいますが、ぼくのいつていることの意味を、あなたはほんとうには理解しておられないと思います。もっとも小説家であるあなたが、こういうつもりであることは、すぐぼくは気づくようになりますました」

「ぼくは小説の方で忙がしいのだから、きみは、このぼくの面倒を見てくれたまえ。ぼくはとてもぼくのことにはかまっていられないのだから。もちろん、ぼくといったが、ぼくだけのことでなくて、ぼ

くをこの世に出したり、ぼくを育てたり、ぼくとつきあった家族や男女すべてのことをいうのであって、その中には年譜作成者のあなたのことが入っているところか、重要な人物ではあるけれどもね」

小説家は夢みるような表情をしてきいていたが、さいごのところへくると、我に返った。そのような表情になったのは、さっきもいったように、自分のいいようなことを他人がいうものだからであつたが、ただそれだけのことではない。それはまさに、対話をしている相手（とはいっても、話をききたいといっただけで、そのあと、ひとりしゃべりをつづけている。そして、ひとりしゃべりの方がきいているものとして肉体的には楽、精神的には気楽であることもあつたが、そんな下劣ともいふべきもののこととはもともと問題ではない）が主題にしているようなことがそのまゝいま現に起っているという一致の喜悅であつた。

まったく彼は下駄をあずけていたのであつた。煮るなり焼くなり、そちらの自由にしていゐから、宜しく頼む、と寛大さを示したともいつてよかつた。どうでもいいものだから続けるというつもりでないことぐらい誰でも分ることだ。それにしても、どこかで刻々に忘れさつて、他人ごとみたいに思っていることと非常に深いかんけいがある。この他人事のように思うということの中に、何かいいしれぬ、あやしげな、不道德というようなことを上廻る空白があつて、本質的に許せぬところがありそうである。そういうことを考えると、情けない気分になる前に、一種の満足をおぼえ、恍惚となる。

両親や家族やつきあつた男女……とこゝろいわれると、その一言一言が小説家をうつとりとさせた。彼本人がいったことになつてゐるけれども、彼がいったかどうか分らない、彼がいったのではないであらう。たとえ彼がいったとしても、誰の口をかりてでもそうだが、とくに年譜作成者によつてそうだといわれたとしたら、自分と何の関係があるらうか。

小説家が我に返る前の状態を、年譜作成者は当然見のがさなかつた。待ちかまえていたのかもしれない

い。そして、まちかまえていることによって、どんな場合にでも、対等になることができるからである。多くの人のそういつたことが記されている。死にたいしてのことだが、ある父親はこういつた。

「かねて思っていた、いつかこの息子を自分の手で殺さねばならぬときがくると」

母親はいつた。

「こんなことになるとしても、それを恨むことは出来ないとかくごはしていた。なぜなら、私はこの息子をうんだのは自分であり、それ以前にこの人と結婚したのだから。父に殺された息子の妹として、私はうまれたのだから」

息子はいつた。

「私はこのことが起ったということを知ったとき、そのことがらが、自分の育った部族の敵となることであり、自分は今ならず父の手につかまり、母の前であっても殺されるということを悟っていた」

対等になるとは、運命にたいしてである。自分でそうすることによって、選ばれたものでないにせよ、いくらかそれに近いものでせめて一人前になることはできる。運命にたいして対等になりそこなうときでも、ほかの人間とばかりでなく、運命にたいしてさえも対等になることはできる。早くも年譜作成者さえも小説の中の一人物のようになり、小説の中で、小説家自身もまた一人物となって住みこみ、二人して対等になろうと思つてでもいるようだ。

この常套手段というか作戦というか、この姑息な態度が芽生えていることにしても、一言のサインがなくなつて、相手が気づかぬはずはない。年譜作成者はこう考へているのである。

小説家本人はこのところ忘却という術さえおぼえはじめたように思われるが、ひよつとしたら、あるとき、積極的に忘却に心がけたのかもしれない。寛大とか自由とかの含みをもたせてはいるが、それをハズミにして、時間を超越してしまふと虫のいいことを思ひはじめた気配がある。下駄をあずけると

は、こういうことなのだ、と。

対等になる方法、ということをいったのは、小説家だ。ルイ十四世の皇太子の教育係であつたラ・フォンテーヌは、彼の寓話詩を献上するにあたって、イソップの伝記とイソップの物語の意味を説明することからはじめた。

彼が例にあげている二つの寓話のうちの一つは、侵略にあたつて心せねばならないところの教訓で、うっかりすると忽ち形勢逆転となるといふ動物物語だが、もう一つも大同小異のものだ。古井戸へおちたキツネは、ヤギを利用して外へ出た。ヤギは井戸の中に残つたのか、けつきよく餌食になつたのか、どちらかであつたが、皇太子教育係のこの詩人は、ヤギのようにうっかりしては身と国の両方いっぺんにほろぼしてしまうのですよ、といっている。年譜作成者は小説家がこういっていることを記憶している。

ラ・フォンテーヌやイソップの意図に反して、ヘマをしたヤギは、たとえ、井戸の中で餓死したか、キツネの歯でかみくだかれてしまったことは事実であるが、その寓話の中では、キツネに一步も劣るわけではない。永久にこの物語の中で生きつづけるというだけではない。キツネと対等である。ただそれだけだろうか、と小説家は、せっかちな筆致であえぎながら、もしこのことを書きおしたり、告げずにこの世を去ることがあると、歴史が重大なミスをしながら駆け去つて行つてしまうから、そのそばへ走りよつて一撃を加えておかなければならない、といったように受けとれるいい方をしている。

ヤギは物語の中でも対等なんではない。愚かなうっかりものである。同情さえもうけられないように書かれている。当たり前だ。書いたものがそう思っているからだ。この扱いが物語の中では、ヤギをキツネと対等にしたのであるが、もともと作者によつて対等でないものが対等と見えるのだから、そこへこのぼる階段は何を示すのだろう。

これが小説家が身のほどをわきまえずに、歴史に挑戦している姿であった。年譜作成者は、いまそれを思い出した。正確にいうと、自分がカードにノートし、具体的な事例にすると三つになるが、その分だけ、つまり三枚のカードに書き入れ、それだけではまだ足りないかもしれない、と思ったために、保留とか未整理の分として、その文章全文を書きとって、それにしても分類せねばならぬので、非常に苦慮したうえ、年譜作成者独自の解釈と批評をもとにしたテーマによるタイトルをつけ、そのタイトルの頭文字で分類して、その箱の中におさめておいた。

その解釈の内容やテーマのことは、たぶん年譜作成者はあかさなつもりであろう。何のたれに對等というようなことを、いきり立つというか、せきたつてくりかえしていたのであろう。何のためか。對等というもののためか。そんなことではあるまい。ヒューマニズムのためか。そんなことはない。イズムなんてものを、この男にあてはめることはムリである。ムリというより、そうしたことにはふれたり、そのことがら全体とこの男との二つを較べ合わせて考えるだけで、口惜しいくらいのものである。では、アナキーイなのか。そんないい方が何の役に立とうか。

だから、年譜作成者の解釈は、ほとんど無意味と見えるほどであることの方がいいくらいなのであろう。一つの解釈を拒否するというようなことでもない。何かしら、小説家は旅をしているのである。現実に彼は旅ざらいといつてもいいくらいだから。旅といつても、普通のものではない。年譜作成者はそのことを勘定に入れた。

年譜作成者が思い出したというのは、どちらかというところ、このファイルの方のことだったかもしれないが、それはそっくり、小説家があずけて行つた下駄なのである。せつせと下駄を入れる下駄箱を作っているみたいなのである。

年譜作成者はうっとりしていて我に返つた小説家にいった。平素から、とても親しみをかんじている

かと思うと、ヒステリックな応対をし、そのあと手紙を書いてくる。近況を知らせるようにいつている。近況の中には、下駄箱が下駄といっしょに焼きすてられてしまったのではないかとさぐっている様子が見える。ハッキリと見える。見えることが目的でさえあるようである。表向きは何でもないようだ。しかし彼が暗号を解読するつもりになるとファイルがすべての証拠だと考えていることが明瞭だ。といって、それはくりかえすが下駄である。燃やす気になると、何といっても、燃えやすいものだから気をつけて、といっているようである。

「ぼくはあなたに二つのことをいいたい」

と年譜作成者はいった。

「その一つはこういうことです。小説家のあなたは、あなたという人間のことをどう考えているのですか。ぼくは何もその部分のあなたというのが、うまくいえないけれども。何もぼくは、こんなこと考えなくたって、あなたに問いつめる必要もないし、あなたは、こういわれるでしょう。『そのところは適当に考えたらいいじゃないの。昔からムツカシイことはいわれないことになっているし、そこにかえって真実、というか真理というか、ウマミというか、そういうものがあるのではないの。それに小説を書いたからといって、その中に出てくるぼくに似た人物やそのほか実在の人物と似た人物や、それからあなたや』というぐあいにはぼくのことまで持ち出しながら。要するに、その人物は自分の思うように『生きて行けばよいので、その意味ではぼくだって、生きて行きますからね。そんなに気にしてやることはないのじゃないの』というふうにいるのですからね」

「ぼくその通りといっているのではないかね。すこし無責任にきこえるけれども。それにまるでぼく自身みたいだね」

と小説家はむしろ感心したようにいった。

「ぼくのいうのは」と年譜作成者はいった。「あなたはそうぼくにいったということも、ある日小説の中に書きますよ」

「そんなことはないよ」

「いや、きつと書くのです。何らかの形で書くのです。あなたに限ったことではない。書かないくらいなら、むしろぼくは軽蔑したいくらいです。もちろん、すっかり変えたり、自分でもある日ぼくとういうことをいいあったことさえ忘れているかもしれないけど」

「とにかくこれからのことだから何ともいえない」

「そんなことをいつているのではないのですがね」

といったが、年譜作成者はどうしてかあきらめずにつづけた。小説家はじめて真剣に耳をかたむけはじめたように見えた。

「ぼくはさつきもちよつといいかけたのですが、ぼくは正義の味方というわけではないが、あなたに奉仕し見放されながら、といったって、むしろ彼はその自由を、小説にならなかつた、独特な、彼自身であるところの、実のある自分を謳歌してもいいのですがね。しかしやがてまたあなたの小説の中に吸収され、また放り出される」

「それ、誰がいった？　なるほど。おそらくもつとうまく具体的に詩的にいつているのだろうね。それともきみが考えたことかね。それともぼくがいつていることかね。どこかでぼくが書いたことがあったかね」

「さあ、どうでしょうかね。ぼく自身の意見かもしれないですよ」

年譜作成者は含みのある笑いをもらした。すると子供じみた愛らしい顔になった。久しぶりに見た、と小説家は思った。

「ぼくはファイルを見せてもいいのですがね。どうせ、あなたは忘れたといいたいのではないですかね。ついでにファイルのことをいえば、台帖になり、台帖を破壊する潜在的な力をもったものですがね」

小説家はどこかに書いたかもしれないが、ほんとうに忘れていたも同然だった。もちろん、具体的にどう書いたかということも、いっしょに忘却の彼方につれさられてしまっているような思いだったが。たとえ重大なこととしてもこんな始末であった。果して記憶していること、記憶していると思われたがっていることは、何物なのだろう。

年譜作成者の方も半ば習慣的になっている反省をした。まだ話題から離れていない問題と、さっきの「対等」との比較研究を十分にできてからということであった。どうしてか分らぬが、ふかい絶望におちこみそうになった。いわば、年譜作成者の口にした一つのセンテンスが、二人の対話者を鉢合わせさせてそこにあることを忘れていた頭の後ろの空間の中で、それぞれ痛みの退くのを待つことにしたといったようなものであった。

自尊心を保つ最上の方法は、自尊心を傷つけた存在を忘却することだという鉄則を、これまた二人とも思い出したのであろうか。今どき値打の下落した、そのようなものを傷つけられたとしてのであるが。何しろ忘却への道は何となく開かれていたのであった。これほどふかい関係にある年譜作成者が、咎めながら、みずから同じことをしないとどうしていえよう。ときどきは似ることが、小説家の死を仮想して鼓舞するときの生甲斐につぐものであったのかもしれない。

二人は立ち直った。一人の人物のように見えた。だからもうひとりの小説家ともいべき人物はいった。

「あなたは、都合のいいときには思い出して、奉仕させるか、あるいは略奪し、凌辱するか、つまり、ドレイあつかいするともいえる。いいかえると、ドレイ相応の女でしかなくなっているのかもしれない